

初対面 3 人会話におけるあいづちの談話展開上の機能⁽¹⁾

大 塚 容 子

Function of Back-channels and Discourse Development in Conversation among Three Persons

Yoko OTSUKA

Abstract

The different back-channels are used in the different positions, based on the understandability of the whole meaning of the speaker's utterances. The purpose of this study is to examine what kinds of back-channel are used in a first-encounter conversation among three males, and to analyze the function of each back-channel, from the perspective of the understandability of the whole meaning.

The Japanese back-channels are divided into three groups: one is the back-channels which are used when the listener can understand or predict the whole meaning of the speaker's utterance, the second is the back-channels which are more often used when the listener can understand or predict the whole meaning, and the last is the back-channels which are used at various degrees of understandability.

Key words

back-channel, function, discourse development, grammatical competence

はじめに

日本語会話の特徴の一つとして「あいづちを打つ」という聞き手の言語行動を挙げることができる。日本語会話におけるあいづちの研究は1980年代以降、様々な観点から盛んに行われるようになり、その頻度（水谷（1984）、黒崎（1987）等）、生起環境（メイナード（1993）、中島（2011）等）、機能（ザトラウスキー（1993）、堀口（1997）等）等が調査されている。また、談話のレベルであいづちを分析したものとして森山（1989）、田窪・金水（1997）等が挙げられる。

日本語会話では話し手が情報提供をする場合、その情報を一方的に一気に提供するのではなく、情報提供の間に聞き手からのあいづちが挟まれることが多い。聞き手は提供された情報を黙って聞くのではなく、あいづちを打つことによって話し手の情報提供に何らかの働きかけをする。話し手の情報提供の合間に打たれるあいづちは談話展開上、どのような機能をもっているのだろうか。本稿は談話展開の観点から、あいづちの形式と機能を分析するものである。

1. あいづち

1-1. あいづちの定義

あいづちは研究者により様々な定義がなされているが、本稿では堀口（1997：42）に倣い、あ

いづちを「話し手が発話権を行使している間に、聞き手が話し手から送られた情報を共有したことを伝える表現」と定義する。堀口（1997）は、繰り返し、言い換え、先取り発話もあいづちと同様の機能をもつものとして解釈しているが、本稿ではこれらをあいづちに含めることはしない。

1-2. あいづちの形式

あいづちを形式により次の12種類に分類する。

(1) あいづちの分類

ええ：「ええ、ええ」のように複数回使用されたものも含まれる。

うん

はい：「はい、はい」のように複数回使用されたものも含まれる。

ああ

はあ

へえ

ううん

そう：丁寧形「そうです」「そうです、そうです」が含まれる。

そうですか

そうですね：普通形「そうだね」が含まれる。

複合：「ああ、はいはい」「ああ、なるほどね」「あ、そうですか」のように、一つのあいづち表現のなかに形式の異なるあいづちが複数使用されているものを指す。

その他：「ねえ」「ですね（え）」「なるほど」

1-3. 情報の流れとあいづち

日本語では（2）に示すように、話し手からの情報提供の間に聞き手からあいづちが頻繁に打たれる。

(2) 情報提供とあいづち

289 J 13 で、いつも同じ場所に夕方,,

→290 J 15 ええ。

291 J 13 4時とかぐらいに、あの、こう、同じ場所に、その、電柱に止まって、そのカラス,,

→292 J 15 ええ。

293 J 13 こう鳴いてるんですけど、もうカラスの鳴き方って同じ、ねえ、カアカアってこう鳴くのが,,

→294 J 15 ええ。

295 J 13 こう、あの、一般的なあれですけども,,

→296 J 15 ええ。

297 J 13 途中からワンとかですね,,

→298 J 15 えええ。

299 J 13 あの、こう犬が、その、例えば犬,,

→300 J 15 ええ。

301 J 13 飼ったりすると,,

→302 J15 ええ。

303 J13 同じ鳴き方をまねするようになってきたんです、だんだん。

→304 J14 ああ。

→305 J15 へえ。

情報の流れからあいづちの規定条件を分析した今石（1993：98）は、「話し手の発話を単に『聞いていること』だけを伝えるあいづちは存在しない」とし、情報の提供に対して打たれる聞き手のあいづちは「理解している信号」（今石（1993：99））であると規定した。そして、「『理解している信号』は、聞き手が話し手の情報伝達の意図を確定した場合『あーそうですか』という形式が使われ、不確定の場合は『はい』『ええ』『うん』などの形式が使われる」（今石（1993：99））と述べている。聞き手が話し手の情報伝達の意図を確定したか否かによって、使われるあいづちの形式が異なるというのである。

1-4. 予測能力とあいづち

日本語は述語が文の最後に来るので、文の最後まで聞かなければ意味が確定できないとよく言われるが、これに対して疑問を呈したのが寺村（1987）である。寺村（1987）は日本語母語話者に対して、ある文を文節ごとに区切って提示し、それに後続する文を予測させるという実験を行なった。この実験によれば、日本語母語話者は提示された文節の後に「どんな種類の語句が来るか」（寺村（1987：57））ということ、文法的知識を使ってかなり正確に予測する力（予測能力）をもっている。市川（1993：2）は後続する要素を予測させる文法的項目の例として、取り立て助詞の意味・機能、従属節による意味的な制約、補語（名詞と格助詞）の述語への制約、副詞の意味・機能を挙げている。

日本語母語話者がこのような予測能力をもって会話に参加しているとすれば、聞き手は話し手の発話内容を予測しながらあいづちを打つことも可能である。前節で述べた、話し手の情報伝達の意図の確定という問題と絡めて考えると、聞き手は話し手の情報伝達の意図が確定されなくても、文法的知識により情報伝達の意図が予測できたことを表わすあいづちを打つことができるはずである。

1-5. あいづちの分類

本稿では、予測能力を踏まえ情報伝達の意図の確定という観点から談話展開のなかでどのような形式のあいづちが使用されるかを調査・分析する。具体例を示すと、(2)は「カラスは同じ場所で同じ時間にカアカアと鳴くが、犬を飼ったりすると、カラスが犬の鳴き声を真似するようになる」という情報を提供している場面である。この一連の情報提供の間に打たれたあいづちを、(3)のように分類する。

(3) 情報の質によるあいづちの分類

情報伝達の意図が不確定の場合：開始

継続

情報伝達の意図が予測可能の場合：予測 A

予測 B

情報伝達の意図が確定の場合：完結

まず、情報伝達の意図の確定度により、不確定の場合、予測可能の場合、確定の場合の三つに分

類する。不確定の場合、新しい情報が提供され始めた、最初の発話文の後に打たれたあいづちを「開始」と呼ぶことにする。情報の提供が引き続き行なわれていると調査者が判断した発話文の後に打たれたあいづちを「継続」と呼ぶことにする。情報伝達の意図が確定されると調査者が判断した発話文の後に打たれたあいづちを「完結」と呼ぶことにする。

予測可能な場合、「予測 A」と「予測 B」の2種類に分類する。「予測 A」は(4)のように、後続の要素が一つに限定できる場合である。

(4) 「予測 A」のあいづち

42 J14 ただ、まあ、奈良に来て、その、まあ、奈良っていても、奈良市のほうは、まあ、割とまだすごしやすいかなと、

→43 J15 ええ。

44 J14 思うんですけど。

(4) では J14 の「すごしやすいかなと」という発話から「思う」という具体的な述語が予測可能である。

「予測 B」は文法的知識により、どのような発話内容が後続するかを予測できるものである。この場合、予測できるのはあくまでも発話内容であっても、具体的な文法形式ではない。

(5) 「予測 B」のあいづち

147 J14 昔はもう、そこらじゅうに穴掘っていたように思うんですけど、

→148 J15 ええ。

149 J14 最近はどうだいぶ数が減ったと思うんですね。

147 の J14 の発話の内の、取り立て助詞「は」、逆接の接続助詞「けど」により、149 の発話内容が予測可能である。

2. 調査

2-1. 調査資料

本稿で使用するデータは約30分間の男性3人による初対面会話⁽³⁾である。会話はビデオに録画すると同時に、ICレコーダーに録音した。会話収録場所は奈良、会話参加者は J13、J14、J15 で、いずれも同一の大学院に通う学生である。会話のテーマは奈良についてである。

2-2. 調査手順

会話は宇佐美(2011)に基づき、発話文を単位に文字化した。そして、宇佐美(2012)を使って、まず、あいづちを(1)の12種類に分類しコーディングした。笑いから成る発話文は x と、それ以外の発話文は na (non applicable の略) とコーディングした。

次に、コーディングしたそれぞれのあいづちを情報伝達と予測能力の観点から、「開始」「継続」「予測 A」「予測 B」「完結」に分類した。

3. 結果

3-1. 各会話参加者のあいづちの使用状況

各項目の頻度と、会話参加者ごとの項目の総計に占める項目の割合を表1に示す。

J15 の na の総計に占める割合が 39.34% になっていることから、J15 があいづちを頻繁に打っていたことがわかる。⁽⁴⁾12種類すべてのあいづちを使用したのは J15 のみである。なかでも「ええ」の

表1 各項目の頻度と、会話参加者ごとの項目の総計に占める項目の割合

会話参加者	ええ		うん		はい		ああ		はあ	
	頻度	割合	頻度	割合	頻度	割合	頻度	割合	頻度	割合
J13	1	0.43%	0	0.00%	4	1.72%	13	5.60%	1	0.43%
J14	2	0.70%	9	3.14%	2	0.70%	5	1.74%	1	0.35%
J15	101	30.33%	13	3.90%	5	1.50%	45	13.51%	2	0.60%

へえ		ううん		そう		そうですか		そうですね	
頻度	割合	頻度	割合	頻度	割合	頻度	割合	頻度	割合
0	0.00%	1	0.43%	1	0.43%	1	0.43%	6	2.59%
0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	16	5.57%
3	0.30%	1	0.30%	3	0.90%	2	0.60%	9	2.70%

複合		その他		Na		合計	
頻度	割合	頻度	割合	頻度	割合	頻度	割合
4	1.72%	0	0.00%	200	86.21%	232	100.00%
5	1.74%	3	1.05%	244	85.02%	287	100.00%
9	2.70%	9	2.70%	131	39.34%	333	100.00%

総計に占める割合が30.30%であることから、J15のあいづちのほとんどが「ええ」であったことがわかる。次に使用数の多いのが「ああ」である。

J13のあいづちから成る発話文数は32、J13の発話全体に占める割合は13.79%、J14のあいづちから成る発話文数は43、J14の発話全体に占める割合は14.98%である。J13が最も多く使用したあいづちは「ああ」、J14が最も多く使用したあいづちは「そうですね」である。あいづちの使用状況には個人差があることがわかる。

3-2. あいづちの談話展開上の出現位置

あいづちが現われた環境とその生起数を表2に示す。

表2 あいづちの生起環境と生起数

開始		継続		タイプA		タイプB		完結		合計	
頻度	割合	頻度	割合	頻度	割合	頻度	割合	頻度	割合	頻度	割合
39	14.08%	55	19.86%	7	2.53%	34	12.27%	142	51.26%	277	100.00%

「完結」、すなわち、話し手の伝達情報の意図が確定されたところで打たれるあいづちの数が最も多く、半数以上を占めている。伝達情報の意図が予測可能なところで打たれたあいづちを合わせると、66.06%に上る。

次に示す表3は12種類のあいづちが情報伝達の意図の確定度のどの位置に現われたのかを示したものである。

表3 あいづちの出現位置

あいづち	出現位置		開始		継続		タイプ A	
	頻度	割合	頻度	割合	頻度	割合	頻度	割合
ええ	27	25.96%	37	35.58%	1	0.96%		
うん	5	22.72%	6	27.27%	0	0.00%		
はい	1	9.09%	1	9.09%	0	0.00%		
ああ	5	7.94%	9	14.29%	5	7.94%		
はあ	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%		
へえ	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%		
ううん	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%		
そう	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%		
そうですか	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%		
そうですね	0	0.00%	0	0.00%	1	3.23%		
複合	1	5.56%	1	5.56%	0	0.00%		
その他	0	0.00%	1	8.33%	0	0.00%		

タイプ B		完結		合計	
頻度	割合	頻度	割合	頻度	割合
11	10.58%	28	26.92%	104	100.00%
0	0.00%	11	50.00%	22	99.99%
2	18.18%	7	63.63%	11	99.99%
12	19.05%	32	50.79%	63	100.01%
2	50%	2	50.00%	4	100.00%
0	0.00%	3	100.00%	3	100.00%
0	0.00%	2	100.00%	2	100.00%
3	75.00%	1	25.00%	4	100.00%
0	0.00%	3	100.00%	3	100.00%
2	6.45%	28	90.32%	31	100.00%
1	5.56%	15	83.33%	18	100.01%
1	8.33%	10	83.33%	12	99.99%

3-2-1. 話し手の情報伝達の意図が確定されたときに打たれるあいづち

「はあ」「へえ」「ううん」「そう」「そうですか」「そうですね」は話し手の情報伝達の意図が予測できるときか、確定されたときにしか打たれていない。次に具体例を示す。

(5) 「はあ」の例

465 J15 あの、私は学部のあるところに、あの、名古屋にすんでたことあるんですけど、

466 J14 はい。

467 J15 そんなときは名古屋の町っっちゃうのは、もう、まあ、それもやっぱり大阪と似てる

ところもあると思うんですけど、都会なんで、もう、町の中で住んでるようになってたんですけども。

468 J14 はい、はい、はい。

469 J15 奈良に帰ってきたら、やっぱり自然があると、まだまだアスファルトで舗装されてるとこじゃなくて、土のところもあるとか。

→470 J14 はあ。

469のJ15の発話で「奈良に帰ってきたら自然があつてよい」という情報を得て、470でJ14は「はあ」というあいづちを打っている。

(6)「へえ」の例

274 J14 カラスはたぶん日本全国どこも多いと思いますけど。

275 J15 ええ、ええ。

276 J14 うん、あれはすごい。

277 J14 もう、あの、ごみをあさってですね。

278 J15 ええ、ええ。

279 J14 うん。

280 J14 あの連中は、あの、駆除業者の顔を覚えているらしいですからね、あれ。

→281 J15 へえ。

J15は280で「カラスは駆除業者の顔を覚えているらしい」という情報を得て、「へえ」というあいづちを打っている。

(7)「ううん」の例

544 J13 あの、場所によるんですけどね。

545 J15 ええ。

546 J13 府内はそんなことないですよ、結構。

→547 J15 ううん。

547でJ15はJ13の発話内容に対して否定を表わすあいづちを打っている。

(8)「そう」の例

321 J14 カラス、すごいですね。

322 J14 あんな、オウムとかインコならまだしも<カラスも声を変えられるっているか>{|<|}。

→323 J13 <そうです、そうです>{|>|}。

323では、「カラスも声を変えられる」という情報に対して「そうです」を2回用いて応じている。

(9)「そうですか」の例

311 J13 そうというのは、あの、気付いたりとかはしたことないですか？。

312 J15 いや。

313 J15 ないですね。

→314 J13 そうですか。

J13の質問に対する答えに、「そうですか」と応じている。

(10)「そうですね」の例

325 J14 考えてみたら、そもそも、あの、声帯は持ってんのは、どの動物も一緒なわけで、

結局,,

326 J15 ねえ。

327 J14 その幅が違うだけで、もしかしたら結構意外にいろんな声出せるんかもしれない
ですよ。

→328 J13 そうですね。

327の同意を求める発話に対して328で「そうですね」とあいづちを打っている。

3-2-2. 話し手の情報伝達の意図が確定されたときに打たれる可能性が高いあいづち

「はい」「ああ」「複合」「その他」は話し手の情報伝達の意図が確定されないときよりも、予測可能か、確定されたときに打たれることが多い。具体例を示す。

(11) 「はい」の例

86 J14 奈良に来てびっくりしたのは、その、霧がちょっと出てきた、あれで、すごいわ、
真っ白だって感動しましたね。

87 J15 <笑い>。

→88 J13 はいはい。

86のJ14の発話で情報伝達の意図が確定される。J15の笑いの後に、J13が「はい」を使ってあいづちを打っている。

(12) 「ああ」と「複合」の例

105 J13 実際に、やっぱり、あの、まあ、あんまり珍しい話じゃないですけど、気温も全然違いますよね。

106 J13 あの、大阪に帰ってきたら、ちょっと、ああ、あんまり寒くないな、

→107 J15 ああ。

108 J13 と思うんですよ。

→109 J15 ああ、そうなんだ。

J15はJ13の発話に対し、「ああ」と「ああ、そうなんだ」というあいづちで応じている。

(13) 「その他」の例

233 J14 ちゃんと彼らも生き残りを賭けて,,

234 J13 ああ。

235 J14 戦っているんですよ。

→236 J15 ですね。

233と235のJ14の発話に対してJ15が236であいづちを打っている。

3-2-3. 話し手の情報伝達の意図が不確定のときに打たれるあいづち

「ええ」「うん」は情報伝達の意図の確定度の様々な位置に現われるあいづちである。「ええ」はどちらかと言うと、話し手の情報伝達の意図が不確定のときに打たれることが多い。

(14) 「ええ」の例

289 J13 で、いつも同じ場所に夕方,,

→290 J15 ええ。

291 J13 4時とかぐらいに、あの、こう、同じ場所に、その、電柱に止まって、そのカラス,,

→292 J15 ええ。

293 J13 こう鳴いてるんですけど、もうカラスの鳴き方って同じ、ねえ、カアカアってこ

- う鳴くのが,,
- 294 J 15 ええ。
- 295 J 13 こう、あの、一般的なあれですけども,,
- 296 J 15 ええ。
- 297 J 13 途中からワンとかですね,,
- 298 J 15 えええ。
- 299 J 13 あの、こう犬が、その、例えば犬,,
- 300 J 15 ええ。
- 301 J 13 飼ったりすると,,
- 302 J 15 ええ。
- 303 J 13 同じ鳴き方をまねするようになってきたんです、だんだん。

J 13の情報提供の間にJ 15が「ええ」というあいづちを打っている。290が「開始」のあいづち、292、294、296、298、300、302が「継続」のあいづちである。

(15)「うん」の例

- 154 J 15 気候とか地形もそうですけども、あの、やっぱり町の構造とかというのも、何か、奈良っていうの、まだあんまりそんなに建物もないですし,,
- 155 J 14 うん。
- 156 J 15 基本的に三条通とかは昔のままの形を残してますから,,
- 157 J 14 うん。
- 158 J 15 そういう地形的地形的にもそうですし、町の作り方にしても、きれいやなどは思いますけどね。

J 15の情報提供の間にJ 14が「うん」というあいづちを打っている。

4. 考察

話し手の情報伝達の意図の確定度により、あいづちは3種類に分類することができる。まず、話し手の情報伝達の意図が予測される位置か、確定される位置にしか現われないあいづちがある。「はあ」「へえ」「うん」「そう」「そうですか」「そうですね」の六つの形式である。このうち、「そう」「そうですか」「そうですね」は「ソウ」系のあいづちとしてまとめることができる。この調査結果は、聞き手による話し手の発話内容の理解度によってあいづちが使い分けられると仮定し、あいづちの種類とその形式を明らかにした陳(2001)の結果と一致する。また、今石(1993: 100)が指摘するように、これらのあいづちは、「理解しているという信号」に加えて、「肯定的態度」、「否定的態度」、「感情表出」が表わされている。「はあ」と「ソウ」系は「肯定的態度」、「うん」は「否定的態度」、「へえ」は「感情表出」を表わしている。

次は、話し手の情報伝達の意図が不確定のときよりも、予測可能か、確定されたときに多く打たれるあいづちがある。「はい」「ああ」「複合」「その他」である。「複合」「その他」のあいづちは情報伝達の意図の確定度により様々なあいづちが使用されたと思われる。

「ああ」は、その使用数の71.43%がJ 15によるものである。個人の特性が関わっている可能性がある。「はい」については「うん」と比較して述べる。

3番目は、情報伝達の意図の確定度の様々な位置に現われるあいづちである。「ええ」と「うん」である。中島(2011)は現代日本語研究会編(1997)に収録された自然談話におけるあいづち、

「はい」と「うん」の出現頻度を、場面、世代、性別、年齢、親疎関係の五つの観点から調査している。「はい」と「うん」の出現頻度を比較すると、「はい」より「うん」のほうが、2倍以上出現頻度が高く、「うん」は「インフォーマル場面だけでなくフォーマル場面にも多用され、その使い分けはあらたまり度に左右されない」(中島(2011:158))という。本調査会話は、同世代の男性による初対面会話であるから、これらの五つの要素は固定されている。本調査会話でも「うん」は「はい」より使用数が多く、情報伝達の意図の確定度の様々な位置で用いられるあいづちであることが示された。ただ、「はい」と「うん」の使用には個人差があり、「はい」は3人の会話参加者全員が使用しているが、「うん」を使用したのは、J14とJ15のみである。

「ええ」も様々な位置で用いられているが、使用された「ええ」の97.12%がJ15によるものであることから、「ああ」と同様、J15の個性によるものであるとも考えられる。

終わりに

話し手の情報伝達の意図の確定度という観点から、男性3人による初対面会話で使用されたあいづちを調査分析した。話し手の情報伝達の意図の確定度により使用されるあいづちに違いがあることがわかった。本調査は限られたものであり、個人の特性が関わっている可能性も高い。今後データを増やすことにより、それぞれのあいづち形式の談話展開上の機能を明らかにしたい。

注

- (1) 本稿は、平成25年度(2013)岐阜聖徳学園大学研究助成金を受けた。
- (2) 文頭の数字はライン番号を示す。発話文番号、発話文終了記号は省略する。
- (3) 本稿でデータとして用いる会話は大学英語教育学会待遇表現研究会の資料である。会話参加者番号は待遇表現研究会で付けられたものである。
- (4) J15のあいづち行動については大塚(2011)を参照のこと。

文字化の記号について

- 。 発話文の終わりであることを示す。
- .. 発話文が終了していないことを示す。
- ?。 疑問の発話文であることを示す。
- < > |<| 重ねられた発話であることを示す。
- < > |>| 重ねた発話であることを示す。
- < > 笑いであることを示す。
- 語頭の→ 分析の焦点であることを示す。

参考文献

- 市川保子(1993)「外国人日本語学習者の予測能力と文法知識」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』8、1-18頁
- 今石幸子(1993)「聞き手の行動～あいづちの規定条件～」『阪大日本語研究』5、95-109頁
- 宇佐美まゆみ(2011)『基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)2011年版』
- 宇佐美まゆみ監修(2012)「BTSJ 文字化入力支援・自動集計・複数ファイル自動集計システムセット(2012年改定版)」『人間の相互作用研究のための多言語会話コーパスの構築とその語用論的分析方法の開発』平成20-22年度科学研究費補助金基盤研究B(課題番号20320072)研究成果
- 大塚容子(2011)「初対面の3人会話におけるあいづちーラポール構築の観点から」『岐阜聖徳学園大学紀要』第50集、85-95頁

- 黒崎良昭（1987）「談話進行上の相づちの運用と機能—兵庫県滝野方言について—」『国語学』150集、122-109頁
現代日本語研究会編（1997）『女性のことば・職場編』ひつじ書房
- ザトラウスキー、ポリー（1993）『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察』くろしお出版
- 田窪行則・金水敏（1997）「応答詞・感動詞の談話的機能」音声文法研究会編『文法と音声』くろしお出版、257-279頁
- 陳姿菁（2001）「日本語の談話におけるあいづちの種類とその仕組み」『日本語教育』108号、24-33頁
- 寺村秀夫（1987）「聴き取りにおける予測能力と文法知識」『日本語学』第6巻第3号、56-68頁、明治書院
- 中島悦子（2011）『自然談話の文法—疑問表現・応答詞・あいづち・フィラー・無助詞—』おうふう
- 堀口純子（1997）『日本語教育と会話分析』くろしお出版
- 水谷信子（1984）「日本語教育と話しことばの実態—あいづちの分析—」『金田一春彦博士古希記念論文集 第二巻 言語学編』三省堂、261-279頁
- メイナード、K. 泉子（1993）『会話分析』くろしお出版
- 森山卓郎（1989）「応答と談話管理システム」『阪大日本語研究』1、63-88頁

